

エミール・ブートルーの思想

伊 藤 邦 武

はじめに

二〇世紀におけるフランスの現代哲学の流れについて問われれば、誰もがベルクソンの形而上学からサルトルの実存主義への流れと、その後に展開された構造主義とポスト構造主義の理論的發展を思い浮かべることであろう。そして、それ以前のベルクソン哲学に至る一九世紀のフランス思想の流れについて問われれば、多くの人がコントの実証主義に結実するコンディヤックやデイドロの感覚論と、それにたいする反動として形成されたフランス・スピリチュアリズムの思想運動について考えるのがふつうである。

このようなフランス思想の流れの理解は、基本的にベルクソンという偉大な形而上学者の功績を非常に高く評価したうえで、それ以前の思想とそれ以後の哲学という図式で整理されたものであり、それ自身としては決して間違っただけのものではない。しかしながら、一九世紀後半から二〇世紀前半の、いわゆるフランスの第三共和政時代の哲学については、これとは別の見方でその独創性や意義を評価する見方もありうるはずである。本論はそうした別の見方の一つを紹介するものであり、以下ではむしろ、フランス共和政時代に徐々に形成されていった「自由の哲学」というユニークな発想に焦点を当てることで、当時の哲学のもつ潜在的な豊さを理解できるのではないか、という解釈を提示してみたと思う。

「自由の哲学」という言葉は特に、ルヌーヴィエという哲学者によって提唱された思想運動であるが、この運動はその後継思想として、フランスにおける非決定論の思想的系譜という、非常に重要な脈を形成することになるとともに、アメリカにおけるプラグマティズムという新興の哲学運動にも大いなる鼓舞を与えたものであった。本論では、後者の主題については触れずに、もっぱら前者の非決定論の系譜についてのみ、その中心的人物であるエミール・ブー

トルーという哲学者の業績に光を当てることで、この自由の哲学の核心部を理解することを目指す。

1 ブートルーの生涯

フランスの哲学者ブートルーの名前は今日ではほとんど忘れ去られているが、西洋の哲学史の流れのなかで彼が果たした役割はきわめて大きなものがある。なぜなら、一九世紀と二〇世紀にまたがる「第二の科学革命」において、それを背後から動かした「決定論的世界観にたいする異議申し立て」という思想動向を、哲学の場面でもっとも目につく形で表現したのは、この哲学者だからである。

決定論とは何か——。「決定論」とは、世界のあらゆる事象がすべて法則的な支配の下で確定的に決定されているという思想である。「非決定論」とは、これを否定して、世界には偶然や不確実性が存在する余地があるという思想である。ブートルーは一九世紀末からフランスの認識論において大きな力をもった非決定論という思想的運動の祖ともいえるべき思想家である。

ブートルーの主張は、自然世界全体が物理的、化学的、生物的、知性的存在の領域によって階層的な全体をなしており、これらを全面的に貫通するような全宇宙的普遍法則はなく、特に物理的世界における法則的決定性という思想は誤りである、ということである。彼はどの階層にかんしても、その階層の内部からは法則的な支配の下にあるように見えるものが、その上位の階層からは法則の支配を逃れた現象として見出されるという意味で、自然全体には多くのレベルで偶然性が関与しているというのである。

彼のこうした主張は、その先行者として、クールノーの偶然論やルノーヴィエの自由の哲学など、多くの独創的思想との関連を持っている。しかし、非決定論という思想を何らかの限定された主題にとどめずに、包括的な存在論と形而上学のレベルにまで高めたのは、彼のまったく独自の思想的営為の業績である。そして、まさにブートルーのこうした独創性のゆえに、彼の周囲からは、それぞれ彼自身とは異なった角度からではあるが、その思想的方向を共有する幾人かの強力な理論家が生み出されることになった。すなわち、ブートルーが取り上げた問題の一つである、数学的真理が有する永遠の確実性というデカルト的問題意識については、義弟のポアンカレが改めて問題にする一方で、自然法則の不完全決定性については、社会的事実の統計学的実在性という形で、弟子のデュルケームによって具体的な肉付けをなされるようになった。ブートル

一はまさしく、これらの人々の思想的源泉となったという意味で、一九世紀から二〇世紀にまたがった知の革命期において、世界と知識の不確実性をめぐる哲学的反省をそのもっとも基底的なレベルにおいて主導した、決定論批判という思想運動の祖なのである。

本論では、これまでほとんど日本で論じられることのなかったこの哲学者について、はじめに簡単にその生涯の軌跡を見た後、彼の思想の中核を示す学位論文の内容を吟味し、最後にその思想的影響にかんしてスケッチしたいと思う。

まず、彼の思想家としての業績であるが、いうまでもなく後に「非決定論の祖」と見なされるその歴史的な使命は、彼自身がはじめから自覚的に担おうとしたことではない。哲学者としてのブートルー自身が自らに課した思想的使命の基軸は、一九世紀の哲学の世界における唯物論の台頭という動向にたいして、形而上学の再構築をめざすことにあった。彼はあくまでも、当時の科学の発展を全面的に承認しつつ、その発展が精神世界の破壊や弱体化につながる必要のないことを、形而上学の再構築という形で論証しようとした哲学者であると自認していた。

彼の認識論の基本的な構造は、自由な人間精神こそが、あらゆる存在の階層において理性によって決定された（規定された）すべての存在の、目的論的原因であるという形而上学である。科学的決定論（*déterminisme scientifique*）は一切の現象が数学的な必然性と法則的な因果性に従っていると想定する。しかし、実際の数学的推論や法則的説明にはつねに偶然性が伴っており、絶対的な意味での決定論は成立しえない。むしろ、本当の意味での法則的決定論にとっては、精神の自由は否定されどころか、その基礎として承認されなければならない。

彼はさしあたってまずこのような形而上学の構築によって、それまでのフランスのスピリチュアリズムの伝統を生かしつつ、科学的知識のもつ積極的な意義を認める新しい精神主義の哲学の可能性を明らかにしたのであり、そのために長い目で見ると、彼よりも後のベルクソンやバシュラール、あるいはミシェル・セールなどの反カント主義的認識論への方向を示した、と見ることもできるのである。

ブートルーは一八四五年、パリに近いモンルージュで生まれた。二〇歳で高等師範学校に入学にしたが、その時の師はジュール・ラシュリエである。ラシュリエは彼にカント哲学の詳細な研究を勧めたが、同時に、デカルト＝カント型の自然にかんする機械論的説明は決して十全のものとはならないことを指

摘した。ブートルーの哲学は、師のこの教えを具体的に形而上学として構築したものであるともいえる。彼は学生時代に、数学的証明の本性と目的論的因果性の妥当性をめぐる小論文を二篇発表し、それによって従来の自然哲学にたいする批判的視点を表明したが、これらは彼の学位論文においてさらに本格的な研究として結実することになった。

彼は一八六八年に教授資格を取得、翌年ハイデルベルクを中心にドイツでの研究を行った。一八七一年からはカーンのリセで教えるとともに学位論文を作成、七四年に『自然法則の偶然性について』を主論文、『デカルトにおける永遠真理について』を副論文として学位を取得し、その後モンペリエ、ナンシーの大学で哲学教授を務めた後、一八七七年から八六年までの十年間高等師範学校で教え、その後パリ大学の教授として教壇に立った。一九一四年にはフランス学士院会員に選ばれるとともに、イギリス、アメリカ、ベルギー、ドイツなど多くの大学を訪れた。

さて、一九世紀のフランスのアカデミックな哲学において最大の権威をもっていたのは、改めていうまでもなくカントの批判哲学である。カント哲学が主題とする最大の問題は、理論理性の明らかにする自然の機械論的な構造と、実践理性が追求する道徳的人格の世界との関係であり、カントはこの主題を現象と物自体との関係として説明しようとしたが、この説明そのものは多くの哲学者が拒否することになった。カントの問題の核心は、人間の有する自由と自然の内なる必然性との相克ということにあるが、フランス哲学ではこの問題が、カント以前の啓蒙主義の思潮やそれ以降の実証主義の大々的な発展によって、科学と人間の精神との相克として、とりわけ強烈に意識されるようになった。

啓蒙主義の認識論として大きな影響をもたらしたのは、コンディヤックの感覚主義であり、実証主義の認識論として最大の支持を得たのはコントの思想である。これらの感覚主義や実証主義、あるいはこれらに先行するディドロやドルバックの唯物論は、基本的に科学的知識の教える真理こそが本物の真理であり、それ以外の知的領域に真理の存在する余地はないという、いわゆる「科学主義」の立場をとっている。カントの思想は実践理性の優位を説く以上、この科学主義を批判することを主眼としているが、フランスの哲学ではカントの知的土壌であるドイツの哲学世界以上に、より広く影響をもっていた根強い科学主義の思潮に対抗する必要があった。スピリチュアリズムと呼ばれる一九世紀後半のフランス哲学は、基本的にその哲学的方向にかんしてはカントと軌を一にするとしても、さらに積極的な形をとった反科学主義の哲学を、フランス特

有のスタイルで展開しようとしたものである。

コンディヤックの感覚主義にたいする観念論ないしスピリチュアリズム的傾向からする批判についていえば、まずその最初の口火を切ったのは、フランス革命期から王政復古の時代に政治家であり同時に哲学者でもあったメーヌ＝ド＝ビランである。

彼はコンディヤックの感覚の分析の大きな意義を認めつつ、それが人間の精神の働きの全体ではなく、むしろ意志的契機と感情的生活が人間の幸福の追求に果たしている役割を強調した。彼は特に、感覚的受動性と意志的能動性からなる精神の二元的性格が、経験の反復を通じてどのような形で内面の領域を切り開いていくかに注目し、精神においてこの二面性が強く自覚される場面としての「努力」の様相を詳しく分析した。また、経験の反復が形成する「習慣」という状態が存在論的にいかなる特異な様態であるかを分析するとともに、われわれの知性の中核をなす因果的世界把握の起源が、精神の能動的働きの理解にあることを論じた。

このように努力、習慣、精神の能動性を論じたメーヌ＝ド＝ビランは、フランス・スピリチュアリズムの祖とされているが、この思想傾向は一九世紀中葉から、フランスにカント哲学の影響が強く働くようになると、フランス流の新カント主義ともいえるべき新たな哲学の動向を生み出した。その代表的な思想家は、ラシュリエ、ルヌーヴィエ、プロシャール、アムラン、ブランシュヴィックなどであるが、この中でもブートルーにとりわけ大きな影響を与えたのは、ラシュリエとルヌーヴィエであり、反対に、後年ブートルーが雑誌『形而上学・倫理学評論』を中心にして、フランス哲学界の主要な動向を牽引したとき、もっとも強い協力関係にあったのはブランシュヴィックである。

ブートルーの先行者ともいえるべきシャルル・ルヌーヴィエは、一八四八年の革命後に共和主義の論客として活躍するが、第二帝政期に政治活動が制限されるとカント的な批判哲学の企てへと関心を転じ、有限主義、現象主義、表象主義などのさまざまな主張を含む、大部な『一般批判試論』を発表して、カント哲学の手法を継承した。彼はカントにはない独自のアンチノミーの議論を構築することで、決定論の矛盾を暴露して、すべての事象にはいかなる究極原因もないという過激な結論を導くと同時に、意志の自由を積極的に擁護することで、アメリカのジェイムズに大きな影響を与えたり、デュルケームの統計学的思考法に道を開いたりした。彼はまた「科学主義」という言葉を作って、それまでの感覚主義や実証主義への批判が向かうべき目標を明確にした。

一方、高等師範学校でのブートルーの師であったラシュリエは、普仏戦争の敗北後に再び共和制となったフランスにおいて、『帰納法の基礎』を発表することで因果的説明の本質を解明し、「現象」や「力」の概念の解明を通じてカント哲学の理論的洗練に貢献した。また、『心理学と形而上学』を発表して、心理学研究によって明らかになる経験的意味での自我の同一性と、形而上学的要請によって認められる実体としての自我の間にある決定的な断絶を認め、しかも、この断絶そのものを思考しうる「精神の絶対的な自発性」を認めることで、一種の弁証法的な哲学の方向を示した。

さて、形而上学の再構築を通じて唯物論的思潮への反旗を翻そうとするブートルーの哲学は、これらの新カント主義の思想に見られるさまざまな理論的工夫を携えた、反科学主義・反唯物論の伝統に属するものである。しかし、彼の哲学は、科学自体の論理構造を明らかにすることを通じて、その絶対的な確実性の不在を明らかにするという方針を採っている点で、これらの哲学者の手法とは大きく異なっている。というのも、彼はその思想的背景としては間違いなく、フランスのスピリチュアリズムの系譜を受け継いでいるが、科学に対する内在的な理解を通じて新しい形而上学の可能性を探るというこの手法そのものは、むしろアリストテレス、デカルト、カントなどの正統的な哲学の手法を踏襲したのであり、この手法を彼は厳密な哲学史的研究を通じて培ったと考えられるからである。

彼の形而上学的構想は、以下に見られるような『自然法則の偶然性について』を中心とする、非決定論的自然哲学の描出という形で具体化されたが、その理論的基礎を提供したのは、スピリチュアリズムの形而上学そのものというよりも、アリストテレスやデカルト、ライプニッツに典型的に見られる科学を基礎においた形而上学の構築という、きわめてオーソドックスな視点であった。

ブートルーはドイツにおける哲学研究の経験から、ドイツ哲学についての知識を非常に豊富に身につけていたが、哲学史にかんするヘーゲル主義的進歩史観にたいしては、ほとんど共感をもつことはなかった。当時のフランス哲学界においてヘーゲルの思想に触発されて哲学史の重要性を説く思想家の代表は、ヴィクトール・クーザンであった。先に挙げた新カント派の思想家たちは、このクーザンの哲学史にたいする見方には一般に批判的な立場をとっており、この点でブートルーも他の思想家と共通の見方をしていた。ブートルーのドイツ哲学の理解では、この哲学の最高峰はヘーゲルよりもずっと前の、ライプニッツの哲学において示されているのである。

彼は非常に多数の著作を刊行して、当時のフランスのアカデミズムにおける哲学研究のもっともすぐれた成果と呼ばれるものを次々と発表した。その主たる著作だけでも二〇冊以上あり、哲学史と哲学の両分野にわたって非常に刺激的な論考を発表し続けた。代表的なものを挙げると、一八七七一八四年、エドゥアルト・ツェラー『歴史的発展の下で考察されたギリシア哲学』のフランス語訳と解説、全三巻、八九年『一七世紀のドイツ哲学』、九五年、『現代の科学と哲学における自然法則の観念』、一九〇〇年『パスカル』、〇八年、『現代哲学における科学と宗教』、一一年『ウィリアム・ジェイムズ』、死後出版の二七年『ドイツ哲学史研究』、などがある。

これらの作品のなかでも、彼の哲学史家としての名声を確立したのは、ライプニッツを中心に置くことでドイツ哲学の奥行きを十分に示した『一七世紀のドイツ哲学』によってであった。しかも、彼はライプニッツを中心にすることで、ドイツ観念論を主軸とした理解に代わるドイツ哲学の新しい見方を提示しただけでなく、『モノドロジー』と『人間知性新論』について、古代中世近代の哲学史の知識を縦横に活用した詳細な注と解説つきテキストを公刊して、一九世紀後半から二〇世紀におけるライプニッツ復興に大きな役割を果たした。ただし、こうした彼のライプニッツへの傾倒は単なる哲学史的関心にのみよるものではない。むしろ、彼の非決定論的自然像の形而上学の試みにとって、ライプニッツの多元論的哲学は非常に大きな内在的な意味をもっている。われわれはこの点について、以下で多少とも触れることがあるであろう。

2 学位論文の思想

さて、今はほとんど忘れられた哲学者ブートルーの思想を検討するために、われわれはまず、学位論文の主論文であり後に単著として公刊された『自然法則の偶然性について』の方から見てみることにしよう。この作品については、後の一九一六年に英訳本が出たが、ブートルーは英訳本の序文の中でこの学位論文を振り返って、こう書いている。

「私が一八七四年にこの学位論文を博士の学位のためにソルボンヌに提出したとき、私はこの論文がこれほどまでの長期にわたって注意を引くことになるとは、まったく思いもよらなかった。というのも、私が当時提出した考えは逆説的であるように思われたので、ほとんど真剣な考慮の対象になるとは考えられなかったからである」⁽¹⁾

彼の『現代の科学と哲学における自然法則の観念』のほうは、『科学と哲学

における自然法則』という表題で、これより二年前に同じ訳者による英訳本が出たが、その序文で彼は自分の理論のもっとも中心的なテーゼについて、こう略述している。

「科学者たちがそうだと想定しているような自然法則と、実際にある自然法則との間には、絶対的な一致は存在しない。前者は為政者たちによって制定される法律に比べられるものであり、實在にたいしてアプリアリなしかたで課せられている。後者は、われわれが異なった種類の存在が実際にそこへと向かっていると考えうような方向と、調和がとれている。科学がそれ自身の視点から考察する厳格で永遠的で数学的な秩序は、事物の實在において存在する、不可視でしなやかで自在であり、それゆえにこそ美しい一つの秩序というものを、われわれの目から晦ませるのである」。

彼の理論を一言で要約すれば、科学が想定する自然の内なる「厳格で永遠的で数学的な秩序」なるものは實在ではなく、實在の真相は「不可視でしなやかで自在であり、それゆえにこそ美しい一つの秩序」からなるということである。これは別の言い方をすると、自然を形作る第一義的な存在者は出来事、事実と、それらの間の美的調和であり、法則はその後から生じる二次的なもの、人為的に構成された付加物であるということである。

「法則は事実の激流が流れる河床である。事実は河床に従って流れる。しかしその河床を掘ったものは事実なのである。かくして論理学の諸公式の命令的性格は、実際的には正当と認められるべきにもせよ、単なる外見にすぎない。真実においては、客観的な論理的関係は事物に先立つものではない。それは事物から生まれるのであり、事物自体がそれら相互の根本的な類似⁽²⁾や相異にかんして変化するにいたれば、論理的関係もまた変化するであろう」。

ここでいわれる事物の相互の類似や相異こそが科学的法則の内容である。科学的法則も、それを表す論理的関係も、事物の変化に応じて変化するであろう。ブートルーはこのような彼自身の採用する独特の意味での「実証性」という根本的な立場に立脚し、その立場に立って、それまでの多くの哲学体系の暗黙の大前提であった決定論を突き崩そうとする。

カントは、われわれの知性が自然世界を法則的必然性の世界として構成するといった。しかし、この自然必然性は経験的事実という実証的見地から見て正しいのか。

「ところで知性に内在するこの必然的結合の範疇は、事物自体の中にも事実上存在するものであろうか。……

もしも偶然性なるものが、結局、現象の決定条件に対する種々なる程度の無知に由来する幻想にすぎないのならば、原因とは法則の中に陳述されている前件にほかならないであろう。しかし、もしもこの世界が真に還元不可能な偶然性のある程度示しているということになれば、自然の法則はそれだけで自足しているものではなく、それを支配する原因に根拠づけられている余地があるであろう。したがって知性⁽³⁾の見地は、事物の認識の決定的見地ではなくなるであろう」。

ブートルーはこのように、事実の次元に立って自然必然性の支配が否定できるなら、むしろ偶然の世界における合目的性と自由の存在が認められるようになるはずである、と論じる。そのために彼が展開する議論の形而上学な出発点は、全存在の領域における「階層」という枠組みと、それらの階層間の還元不可能性ならびに複雑性・創造性の段階的增加、という議論である。まず、実年には「存在の一般形式」「類と概念」「物質」「諸物体」「本能」「思考」という大きく分けて六つの階層がある。このうち最初の二つは経験的世界とは独立のアプリオリな領域であり、感覚的経験の世界は「物質」から「思考」までの四つの階層からできている。そして、最後の「本能」「思考」という二つ階層は、具体的には「生物」と「人間」と呼んでもよい階層である。

これらの階層は存在論的に異なった世界を形成しており、それらの間には根本的な非連続性がある。延長としての物質は、経験世界におけるもっとも下層の存在であり、力学的な作用を担う物体はその上に位置し、さらに本能はその上位に位置し、思考はもっとも上位の階層に位置する。一つの階層に属する要素は、他の階層の内には存在せず、それを一方から他方への演繹という仕方でも導くことはできない。物質的世界についての科学を本能の世界についての科学に還元することはできず、逆もまた真である。いいかれば、物質的世界の基本的な説明図式である機械論的分析は、本能によって成り立つ生命的世界の説明原理とはまったく異質であり、相互に翻訳が不可能である。

さらに、これらの階層間の間には、上位に行くほどその複雑性の程度が増し、そこに単なる必然性からの逸脱という消極的な意味での「偶然性」とにとどまらない、創造性という積極的な意味での「自由」がより具体的に実現するという性質がある。これは発展的、進化論的な形に書き換えられたライプニッツのモナドの階層モデルであるが、ブートルーはこの進化論を宇宙の進化の観点から説明する。すなわち、宇宙における大規模なエネルギーの凝集は、宇宙の個々の具体的な状態が従っているエントロピーの原理に逆らう形で作用しているの

で、宇宙の最初の誕生にかんする、偶然的で創造的な作用への示唆を与える。世界の階層と創発的な本性からなる自然の全体は、それゆえに固定的な自己同一的全体ではなく、つねに変化にさらされるという本性をはじめから内蔵しており、その本性がますます顕在化する過程こそが宇宙の進行に他ならないのである。

階層性と宇宙論的進化を軸にするこの図式において、学位論文の表題にある「偶然性」ということは、基本的に二つの意味で論じられていることになる。一つは、階層間の関係に関して、ある階層から見て必然であるように見えることも、上の階層からは偶然性の余地をもつという意味での、存在全般にかかわる偶然性の主張である。これは消極的意味での偶然性であるが、その存在の意義は階層が上がるにしたがって、自由という積極的なものに転じる。

もう一つは、特に諸物体の世界における「自然法則の偶然性」ということで、これは六つの階層すべてに言われるというよりも、経験的な物理的世界の法則が表面的には決定論的な形式を装っていても、その内実は厳密な意味での決定論には従っていないという議論である。ブートルーの非決定論の中核はこの部分にあるが、彼は必然性と決定性との区別を強調する形で、この議論を展開する。

科学的知識の対象は基本的に変化する環境世界にある。変化や分裂や発展をまったくもつことのない、端的に存在としてのみ語りうるような世界は、パルメニデス的な一者として想定可能かもしれないが、それ自体として科学の対象とはなりえない。それはほとんど「無に近い必然性」の世界であり、それ自体としては存在論的階層ともいえない裸の有である。知識の対象世界はあくまでも変化や多をもたなければならない。

それでは、自然世界の変化というものはどのように生じるのか。そのことを理解するための第一歩は、必然性と決定性との相違を確認することにある。

「AはAである」は同一律であり、これはいかなる観点から見ても必然的に真である。したがって、必然性の本質は自己同一性である。他方、「Aは $a+b+c$ である」は同語反復ではないため、必然的な自己同一性を表さない。これはカント的な意味では総合判断であり、経験的な真理はすべてこの性質をもっている。そして、もしもすべての経験的な判断が総合的であるとすると、そこにはカント的な意味での因果律が成り立つ。「すべての変化には原因がある」はしたがって、ある意味での必然的な真理であるが、この原理の実質的な意味は現象には恒常的な関係があるということに尽きる。

それゆえ、同一言明としての必然性と総合判断の基礎にある必然的真理とははっきりと区別される必要がある。因果律のような必然性は、厳密な意味での必然性ではなく事象の決定性のことであり、その決定性はそれ自体として必然的かどうか吟味の余地を残す。そして、物質的な世界における現象の量的な性質について詳しく検討すると、経験的な領域での量的同一性が厳密な数学的同一性であるかどうかについて、最終的な確信をもつことはできないものであることが判明し、物質的な世界における同語反復ではない新しい事象の生成の可能性が常に認められることも判明する。

これが、第四階層としての「諸物体」にかんする自然法則の決定性への批判へと至る、議論の大枠であるが、ブートルーの形而上学の図式は、この段階より上の方に進むと、必然性否定としての偶然性よりも、むしろ自由の程度の進展という形で、別の意味をもつことになる。というのも、諸物体と区別される生物的な世界における質的な同一性の経験については、自己同一的な決定性という意味での基本的性格からさらに遠ざかった、「成長変化」という要素が大きな位置を占めることが強調され、そこから、世界における偶然性に代わって、「合目的性と自由」ということが説かれるようになるからである。そしてその進展の先にあるのは、人間精神と神との結びつきという、きわめて大胆な形而上学である。

まず、同じ自然世界であっても生物の世界においては、純然たる物質的な世界における法則的繰り返し以上の変異が、はっきりと認められる。それゆえ、世界は生物の登場によって、繰り返しではなく変化する歴史をもつことになる。生物の世界を特徴づけるのは異種性ではなく「個別性 (individualité)」である。生物は個としての存在の中に有機的な統一性を持ち、個体全体における調和を実現しているが、それだけでなく、存在の意味が成長にあるという意味で、合目的性をはっきりと示している。成長変化を通じた目的の実現の追求、これが本能からなる生物の世界の本質であり、ここには物質的な世界に見られる必然性からの逸脱ということ以上の積極的な変異の幅が認められる。すなわち、生物の世界は自由な世界である。

そして、人間の精神は生物のもつ本能以上に、本格的な自由の幅を有している。精神の本質は思考することであり、思考とは意識作用の別名に他ならない。思考はさまざまなことを概念的に意識するのみならず、感じたり、欲したりする。すなわち、意識の働きは感受性、知性、意志からなる。その特徴は生物のもつ自由が「自発性 (spontanéité)」へと高まり、無数の形で創造性を発揮

できる点にある。それは他の存在に還元できない活動性そのものである。

「しかしながら意識そのものは、他に還元できぬ所与であって、説明しようとすればかえって不明となり、分析しようとすれば破壊されるごときものである。意識の諸要素を細部にわたって調べ、もってそれらを、より低次の機能の諸要素に対比したりあるいは結合したりすることは、意識そのものを見失ってその素材や作品を考察することである。意識は一つの現象でも一つの特性でも、また一つの機能でさえもない。それは一つの活動であり、外的所与を内的所与に変ずる働きであり、いわば生きた鑄型であって、それらにおいて諸現象は次々に変形されることができ、全世界もその中にいれられて自己固有の実質と形態とを失い、自己の現実的本性とは相異なると同時に相似ている理想的形式を帯びうるがごときものである。意識は諸現象をきわめて深く変容せしめる原理であって、すでに知られている諸々の変形を知っても、それにもとづいて意識による変容のいかなるものかを察することはできぬほどである」⁽⁴⁾。

意識というこの存在の階層は、無規定な存在から連続性、異種性、自由な合目的性へと段階的に進化してきた存在の多層的階梯が、本来もっていた偶然性と調和の萌芽を徐々に開花させた結果として、最終的にその十全な実現へと至った段階であるから、宇宙と自然の全体との間にもっとも高度な調和を保ちうる存在である。しかしながら、それは単にもっとも完成された有機的統一であるにとどまらず、より高度な統一、より深い調和を自ら作り出すことで、宇宙の調和そのものの実現をさらに積極的に実現するような存在でもある。というのも、意識はライプニッツが述べたように、宇宙を映し出す「生きた鏡 (miroir vivant)」であるにとどまらず、その理想的形式を作り出す「生きた鑄型 (moule vivant)」であり、宇宙の美的秩序を理解しつつ、その道徳的価値を増大させるものであるからである。

自発性と創造性を本質とする人間精神は、物質的な世界の必然性と偶然性を超えた、真の意味での自由を理解し、自己利益の観点を完全に脱却した絶対的価値の存在を信じ、さらには愛という理想を求めることができる。愛は知性の対象でもなければ、意志の求めるものでもない。それは感受性と知性と意志とが一体となって、自らの有限性を超えるものへと一体化しようとする働きであり、合目的性の最終的な完成形である。愛は有限なものから無限なものへと向かう志向であると同時に、無限なものから有限なものへと働きかける牽引の作用でもある。実際に、愛においては求めるものと惹きつけるものとは一つになることへと向かっている。すなわち、意識としての人間精神はその本性の完全

な開花において、最完全者への愛へと向かう。その最完全者とは、存在の全階梯を包み込み、その目的論的進化の根源そのものである「神」である。

思考の範疇と経験的世界の階層性を順番に検討してきた『自然法則の偶然性について』は、こうして、その存在論的分析の最終段階である意識の分析を足場にして、全存在の存在根拠である神を主題とした議論へと飛躍する。それはこの作品の「結論」が展開する、自然世界の内なる偶然性の存在を参照しつつ、神の本性と働きとを解明するという、きわめて特異な形而上学的洞察の開陳である。

もともと人間は、それ自身が広い意味での創造者であるかぎりにおいて、神のもつ根源的な創造性に与っており、いうなれば「小さな神」としての資格をもっている。意識はそれ自身のあり方を反省し、その自己決定の能力を発揮することで、それ以前の行動における常態を脱却し、さらには新しい習慣を身に着けることで、新しい自分になり、世界の内に新しい人格を存在させることができる。これはどんなに小さな創造作用であっても、れっきとした創造の作業である。しかし、創造性の意味はこれにとどまらない。⁽⁵⁾

「ところで、事物を固定し限られた存在と見る外面的な見方をすてて、われわれ自身のもっとも深い奥底に還入し、われわれの存在をその源泉において捉えることができるならば、われわれは自由が無限な力であることを見出す。われわれは真に行為する時はいつもこの力を感じる。しかもわれわれの行為はこの力を実現せず、また実現することができない。したがってわれわれ自身がこの力なのではない。しかしそれは現実存在する。なぜならそれはわれわれの存在の根柢だからである。

かくして知性は、その必然性の範疇によって、世界と神の中間項となる。しかし神において観念的な可能性以上のものを見、必然性の抽象的観念に真の内容を与えるためには、われわれにはより高次の能力がなければならない。この能力を、われわれは、理性いいかえれば善の実践的認識、において見出すのである。……絶対的に実現されるべき価値をそれ自身において有する目的、……神こそはこの存在者そのものである。そしてわれわれは、神に近づかんとするわれわれの努力のさ中に、われわれ自身のもっとも深い奥底において神の創造の働きを感知するのである。神は完全にして必然的な存在である。

神においては力すなわち自由は無限である。神の力は神の存在の源泉であり、したがって神の存在は宿命の強制に支配されるものではない。……

神は諸々の存在者の本質と現存の創造者である。……

この神の自由の説によって、世界の一般的な諸形式と諸法則との段階組織が示すところの偶然性は、説明を与えられるのである⁽⁶⁾。

ブートルーにとって、世界における偶然性の存在とは、結局のところ、神による多層的世界の創出とその漸次的発展の運動のという摂理の別名である。神の力とは、この摂理によって世界の道徳的完全性を増大させる働きそのものである。そして、この力の発揮が全面的に神の自由にゆだねられているという意味で、自然世界の偶然性の理論は「神の自由の説 (la doctrine de la liberté divine)」となるのである。

さて、学位論文『自然法則の偶然性について』の内容は、概略以上のようなものである。

われわれこれまで、この論文の内容をかなり詳しく見てきたが、この思想は世界と科学についての一つのユニークな見取り図を示していることが認められる一方、その理論に細部については、疑いもなくさまざまな角度から疑問や批判を加える余地があるであろう。特に、これは一つの自然哲学であると同時に、人間精神と神との関係にまで議論が及んでいるという意味では、むしろ純然たる形而上学であり、ライプニッツ型の階層的世界観の一つのタイプと見ることができるであろう。したがって、形而上学としてのこの理論の意味や妥当性についても、詳しく吟味する必要がある。

ここではしかし、この図式についてさらに詳しく議論することはとりあえずせずに、この学位論文に付されたもう一つの論文、すなわちラテン語で書かれた副論文『デカルトにおける永遠真理について』のほうに目を移すことにしたい。というのも、この論文は今まで見てきた主論文と同じくらい歴史的なインパクトをもった論文であると同時に、彼の哲学思想の核心を捉えるうえでも、大きな意味をもつと考えられるからである。ブートルーの思想の独創性と重要性は、まさしくこれら二つの主題を並置したところから生まれてくる。しかし、これらの二論文の関係は、一見しただけでは明らかではないのである（この副論文も単行本として出版された⁽⁷⁾）。

さて、デカルトにおける永遠真理の問題といえは、多少ともデカルトの形而上学の理論的骨格について検討する者であれば、必ずその内実について考えることを強いられるような、この哲学の急所ともいべきテーマの一つであることはよく知られている。一七世紀の哲学者ルネ・デカルトによれば、最完全者たる神は、真理のなかでも偶然的、経験的真理はもちろんのこと、永遠不変の真理についても、その真偽を逆転する自由をもつという。すなわち神は、「同

じものに等しいものどうしは等しい」という論理的真理や、「三角形の内角の和は二直角である」という幾何学的真理など、いわゆるアプリオリな真理、分析的真理、必然的真理、すなわち「永遠真理」について、それを真でないものとする自由をもっているという。デカルトが正しければ、さまざまな永遠真理は、それが論理的に必然であるから真であるのではなくて、神によってそのような真理として創造されたがゆえに真なのである。

今日のあらゆるデカルト研究において非常に大きく取り扱われているこの主題は、しかしながら奇妙なことに、デカルト自身の主要な哲学書である『方法序説』、『省察』、『哲学原理』などには、少なくとも明示的な形ではまったく登場していない。この学説はデカルトの書簡において散見するだけであり、デカルト哲学にかんする理解や批判の長い歴史のなかで、この学説はまったく省みられることがなかった。そうした状況の下で、この独創的な学説を初めて文献的に整理し、その哲学的内実を検討したうえで、この学説がデカルト哲学の理解に決定的に重要であることを初めて論証したのが、彼のこの副論文なのである。

ブートルーによって初めて本格的に注目されたこの主題は、その後のデカルト研究の方向を決定的に変えてしまった。今日のデカルト研究書の一つは、ブートルーから始まって今日のデカルト研究に及ぶこの主題をめぐる解釈上の論争を、一世紀にわたる「黄金の研究史」と呼んでいるが、実際に今日のわれわれのデカルト形而上学の理解の多くは、この学説から逆照射された形をとっている。⁽⁸⁾

さて、この主題に初めて着目したブートルー自身は、この論文で、次のような構成の下に彼のデカルト哲学解釈を展開している。

まず本書の「序文」は、「永遠真理」というこの主題にかかわるデカルトのテキストとして七編を列举して、その概略を示す。ここで列举されたテキストは具体的には、一六三〇年四月一五日のメルセンヌ宛て書簡、一六三〇年五月一〇日のメルセンヌ宛て書簡、一六三七年のメルセンヌ宛て書簡、一六四一年の『省察』「第五答弁」、同「第六答弁」、一六四四年のメラン宛て書簡、そして一六四八年六月二九日のアルノー宛て書簡、の七編である。

次に「第一部」で、このテキスト群の中心的なテーゼを理解するために、それに密接に結びつくデカルトの主要著作の中の議論への参照を行う。このテーゼに結びつく議論とは、『方法序説』『省察』『哲学原理』と、特に『省察』の論駁と答弁において示された、最完全者すなわち神の観念、完全な能力と現実

的作用における完全性、これら二つの関係、相対的矛盾と絶対的矛盾の区別、本質の偶然性と現実存在の偶然性、という五つの主題にかんする議論である。

さらに「第二部」では、この学説が逆に、彼の思想を支える他の哲学的主張にたいしていかなる解明を与えるかを検討する。関連づけられる哲学的主張とは、方法的懐疑、コギト、明証性、神の現実存在、心身の実在的区別、真理と事物、自由意志と判断、というデカルトの哲学体系の根本を構成する七つの主要な思想的支柱である。

最後に「結論」として、以上の分析と議論とを要約したうえで、永遠真理の検討というデカルトの作業が、その哲学のいかなる本性を浮き彫りにしているのかを明らかにする。プートルーの結論は、数学的真理の永遠的必然性をめぐるこれらの議論が、「神の完全性としての神の自由」にかんするデカルトの思想を掘り下げたものであり、この思想が彼の思想全体に深い奥行きを与えている、というものである。

さて、序文で挙げられる七つのテキストはいずれもその後のデカルト解釈の必須参照箇所となったものであるが、そのもっとも有名なものとしては、一六三〇年四月と五月のメルセンヌ宛ての書簡と、四四年のメラン宛ての書簡を挙げることができる。それらのよく知られた書簡の議論からもうかがえるように、デカルトは「三角形の内角の和が二直角に等しい」などの永遠真理について、神がそれを必然的であるべく欲したことはそのとおりであるが、だからといって、神がそれを必然的に欲したことにはならない、と言っている。神は無矛盾な数学的真理を必然的真理とすることを欲したが、そう欲するべく決定されていたわけではない。さらに、神にとっては可能にすることもありえたが不可能にすることを欲したものがあろうが、われわれは知性の有限性のゆえに、それらを可能なものあるいは無矛盾なものとして理解することができない。したがって、われわれはそれを必然的なものと認識するべきであり、それに反するものをあえて追求するには及ばない。

デカルトのこの議論によれば、神の無限知性のレベルにおける論理的可能・不可能と、人間の有限な知性における可能・不可能とはまったく次元を異にしている。人間にとっては普通の意味で論理的に不可能なものを想定することはできず、その存在を仮定することができない。しかし、神にとってはそれを思考することが可能であり、しかも神においては知性と意志の働きとは同一であるから、そうした存在も欲しさえすれば実在させることができる。つまり、「丸い四角」や「内角の和が二直角よりも小さい三角形」も、実際に存在しう

る。

ブートルーはこのラディカルな議論を理解するために、「第一部」では特に、デカルトが公刊した主要哲学テキストを参照しつつ、神の完全性にかんする知性と意志の関係や、「相対的な矛盾と絶対的な矛盾 (contradictiones absolutae vel relativae)」の区別に注目し、さらに本質と存在の区別の問題も取り上げて、デカルトにとってのこの理論の根拠を示す。

ここで議論のもっとも中核をなすのは、「完全存在 (ens perfectum)」としての神をどう理解するべきかという問題である。ブートルーがこの神学的・形而上学的問題を精密に分析するために重点的に依拠するのは、『省察』の論駁と答弁における議論の詳細である。ブートルーは「最完全者」と定義されるデカルトの神概念において、もっとも際立っているのは、意志による可能なものの選択にかんする完全性と、知性による形式的整合性の追求における完全性の二つが、ある意味ではまったく正反対の性格を有しながら、しかもそれらが一致するという事態においてこそ、何よりも神の完全性の本質がある、という思想であるとする。

神には、無差別の自由を行使する潜在的な能力という意味での完全性と、現実能力を発揮することで決定を行うという意味での完全性という、二つの完全性が備わっている。「われわれが精神によって理解するような性格の完全性は、一方では、無限である、あるいは反対のものに無差別に対応する能力を含む。また他方では、現実的に卓説する本質を含んでいる (Perfectio autem, qualem eam mente concipimus, tum potentiam infinitem sive inter contraria indifferentem, tum essentiam actu excellentem involvit)⁽⁹⁾」。

前者はあらゆる可能性についての無差別を許容するという意味で、人間の認識能力を超えたレベルでの可能性を許容する。他方後者は、その選択によってえられた可能な組み合わせにおいて、内的な整合性を隅々まで理解するという意味で、人間の認識能力にとっての必然性の領域を確定する。前者は神の意志の働きであり、すべての本質、形相、普遍の体系の可能性を許容する。いいかえれば、神の意志は、人間のレベルを凌駕したところで、あらゆる可能な必然性の体系のなかから、一つの体系を選ぶことができる。後者は神の知性の働きであり、すべての現実存在、事実、現実における偶然性を決定する。

この神の完全性の理論では、複数の命題の間の矛盾関係は、無差別の自由のレベルで考えられるものと、現実化された事実的世界におけるものでは、その性質を異にしている。神にとっても、絶対的な意味での矛盾は許容できないが、

それはまさに無限存在である神にかんする矛盾であり、例えば「完全なる存在である神が現実存在をもたない」のような矛盾である。反対に、有限存在からなる現実世界における矛盾は、神の視点から見れば相対的な矛盾であり、その反対も決して不可能ではない。それはあくまでも、人間精神にとっての必然的真理、永遠真理であり、神の観点からすれば、「相矛盾するものは同時に存在しえない」とはいえないのである。

他方、「第二部」では、デカルト哲学の主要な支柱である方法的懐疑やコギト、明証性の原理、心身の区別など、すべての論点が、永遠真理をめぐる学説と結びついているということにあるが、とりわけブートルーが強調しているのは、以上のような神の完全性において大きな役割を果たした「無差別の自由」の理論が、『省察』などの主要著作における人間精神と神との関係、ならびに科学的知識の可能性の分析において大きな役割を果たしているということである。

まず、夢や悪霊の可能性を根拠にして展開される、方法的懐疑や過剰な懐疑と呼ばれるデカルトの懐疑論の進行は、神においてその完全な姿が認められる無差別な意志の自由の働きの、人間における類比的な作用として理解される。そして、方法的懐疑を通じて確立される「コギト・エルゴ・スム」の議論は、意志的作用と知性的確定との一致という、神の完全性の本質が、人間においても認められることの証左とされる。一般に、懐疑論を前提したうえでの、「コギト」の論証の性格については、その「エルゴ」の性格が問われることがしばしばあった。つまり、数学的真理と論理的推論の規則が、悪霊などの根拠にもとづく永遠真理にたいする懐疑によって、カッコのなかに付されている以上、この推論は果たして妥当性を主張できるのかが問題であった。

デカルトはこの問いにたいして、これは「前提から結論への直接的推論」という特殊な推論である以上、演繹的規則の妥当性が疑問に付されていても、有効であると答えている。これにたいして、ブートルーは、ここでは意志による懐疑がもたらす「コギト」から、知性による「スム」の認識への移行が、意志と知性との一致という原則によって結び付けられているのだという、ユニークな解釈を提示している。

この分析では同様に、明証性や心身の分離にかんする議論の解釈も、一貫して神と人間における意志と知性との結びつきの問題として提示される。たとえば、明証性についての格率は、生得観念を認識する知性によってその有効性が確かめられているとしても、意志によるその拒否の可能性を内包している

以上、精神の外部にある神の誠実性の保証を必要としている。また、精神と身体との実在的区別も、懐疑論の内なる夢の議論を根拠としたものであるというよりも、むしろ神の完全性に類比的に理解できる人間精神の能力と、これとは類比的に考えることのできない身体との区別という形で、専ら形而上学的な根拠に即して理解直し直されている。

そして、デカルトの形而上学を神の完全性の理解を下敷きにして解釈し直すという、この第二部の最後には、コギトの本質とされる「意識 (conscientia)」についての再考が付されている。それによると、本来のラテン語・フランス語の *conscientia/conscience* では、観念の把握という意味での知覚的、志向的性質と同時に、良心という意味での意志的選択の性質が同時に含まれているが、コギトによる自己意識を強調したデカルトの哲学においてもこの点に変更されていない。というのも、デカルトにとって人間精神の有限性については知性が、完全性については意志が担うとされている限りで、その能力の重心はやはり意志の側にあり、したがって、意識が有意意味な働きをするのは究極的にはその完全性の実現としての善の追求であり、それはすなわち道徳的な価値の追求においてである。『方法序説』におけるデカルトが、新しい科学的探究の果実の一つとして「道徳」を挙げているのは、この意味で、意識の哲学であるその体系の本来の趣旨に沿ったものなのである。

ブートルーのデカルト論は、以上のように、神に即した完全性の理論の展開と、その人間精神における反映の具体相を確認したうえで、最後に、結論において、永遠真理の神による創造というこの議論が、「神の完全性」という形而上学的問題の解明にあることをもう一度主張する。そのうえで、この哲学史研究は、デカルト哲学がその原理にかんして、一方では「二元論」という性格をもちながら、他方では「一元論」の性格をもつという、非常に複雑な構造からなることを結論する。「この哲学の特性は、一方では、神の単一性を正反対の二つの原理の間の相互的な因果関係として理解するとともに、他方では、一切の被造物にたいして、神との相違を認めつつ、同様の本性を帰するところにある (Hujus philosophiae proprium est, Dei unitatem tanquam duorum inter se contrariorum principiorum reciprocam causalitatem concipere, similemque naturam, mutatis mutandis, omnibus creaturis attribuire)⁽¹⁰⁾」。

デカルト哲学は二元論的である。なぜならそれは、意志と知性との対立を認めるからである。あるいはそれは、本質と存在の対立を認めるからである。そしてそれは一元論でもある。なぜならそれは、両者の一致を認めるからである。

二元的でありながら一元的でもあるという、このブートルーの結論は、デカルトの形而上学の領域を超えて、自然哲学としてのその性格にとっても決定的な意味をもつ。永遠真理の領域は論理と数学的真理の領域であり、経験的世界の事実的現象は偶然性の世界である。神はこの対立する二つの領域を同時に創造することにおいて、対立する二つの世界を一つの世界へとまとめあげた。つまり、世界は神の完全性の能力によって、数学的真理が直ちに事実的経験の世界の真理であるべく、創造されたのである。ブートルーによれば、これが永遠真理創造説というラディカルな理論の認識論的帰結である。

3 その思想的影響

以上、ブートルーの学位論文（正・副）について、その内容を多少とも詳しく概観してきた。これらはあくまでも、彼の哲学の出発点をなすものであったが、その問題意識と主張は、その後のソルボンヌにおける講義などを通じても基本的に変わることがなかった。その講義録である『現代の科学と哲学における自然法則の観念』の議論は、『自然法則の偶然性について』で展開された自然法則の不完全決定性を改めて説き直したものである。

先に見たように、ブートルー自身はもともと自分のこの立場が特別に新奇なものでも、独創的なものであるとは必ずしも自認することはなく、むしろそれまでのフランス哲学の蓄積にもとづいた自然像を提起することで、自ずから形成された考えであるかのごとくに理解していた。しかしながら、この理論の衝撃はいろいろなところに反響して、さまざまな影響を思想界に及ぼした。

その衝撃は、カント哲学との対決という点にかんして、まず注目される。周知のように、カントはわれわれの数学的認識と自然学的認識の双方にかんして、それぞれの形式的基礎をわれわれのアプリオリな認識能力に置き、それらの総合によって経験的かつ客観的な知識が成立すると考えた。この哲学では、数学的認識の形式的基礎は直観におけるアプリオリな空間と時間であり、経験判断の形式的基礎は判断におけるアプリオリな超越論的概念、すなわちカテゴリーである。ブートルーの学位論文は、表面的な議論の展開におけるカントの図式の活用にもかかわらず、この認識論的構図にかんして、その両方の妥当性に揺さぶりをかけている。というのも、数学的真理の永遠性にかんして、神の意志という形で形而上学的基礎づけがなされ、結果としてその必然性には疑いの余地があるとなると、算術や幾何学の必然性、確定性、不可疑性には大きな疑問が付されることになるからである。

さらに、まさにヒュームの懐疑論を論駁するべく構築されたカントのカテゴリ表の中心が、カントの後でショーペンハウアーが喝破したように、「実体・属性」と「因果性」の二つからなるとすれば、ブートルーの以上の議論はこれらの概念の汎通的で普遍的な妥当性を否定しているゆえに（存在の階層でいえば第一層と第二層）、カント的なアプリアリな総合判断の可能性を根本から崩してしまうことになる。カントにとっては、その「純粹理性の二律背反」に明らかなように、現象界における自然必然性と、目的の王国における自由の原因性こそが、互いに相反する、別の世界の原理として認められなければならない。しかし、世界が多面的に階層的であり、法則の種類が多重的であるばかりでなく、それぞれの階層において法則的支配の厳格性に程度が認められる、というブートルーの主張が正しいとすれば、カントの「可能的経験一般」からなる現象界という概念は基本的に失効することになるのである。

ブートルーの認識論はこのように、その帰結として、それまで最大の影響力をもっていたカントの認識論の構図を根柢から拒否することを主張した。これは彼に先行するルヌーヴィエやラシュリエのカント哲学を改変することで、より実践的でスピリチュアルな要求に答えるような精神哲学を構築しようとする企てと比較しても、より根本的で大胆な主張である。彼の認識論はカントの認識批判の形式的な基礎を崩すことで、ニュートンの自然像の哲学的基礎づけというそれまでの哲学的目標そのものを廃棄することを導いた。先に記したように、彼の非決定論的自然像は弟子であるベルクソンらの、さらに別種のカント批判の道を用意したのである。

さて、ブートルーの思想はその根本的な批判力のゆえに、フランスの認識論の新しい運動に駆動力を与えた。この点はたしかに疑えない。とはいえ、このことはこの思想のいわば否定的な効果である。それでは、彼はこうした反カント的な哲学の可能性の提示を通じて、積極的な意味では、いかなる哲学の方向を示唆していたのか。非決定論の可能性を提起する彼の思想が、一つの哲学思想として指し示すところはいかなるヴィジョンなのか。

彼の思想を理解するためには、このことを突き止める必要があるが、この問題を解明しようとするためには、あらかじめ多少の思想史的整理が必要である。というのも、これまで見てきた自然の法則の不完全決定性を述べる主論文と、デカルトの解釈を通じて数学的真理の偶然性に目を向ける副論文との間には、少なくとも表面上は、相当大きな齟齬があるように見えるからである。簡単にいうと、前者の存在論はアリストテレス的な目的論であるのにたいして、後者

の哲学は基本的にデカルト主義の圏内の議論であるので、これは一種の水と油ともいえなくはない。その意味で彼の哲学の立場は謎めいている。しかしながら、ここではこの問題は深入りしないで、ただ、ブートルーにあってはむしろ、このような対立する二つの哲学を架橋する役割として、ライプニッツの哲学が大きな役割を果たしたということだけを確認しておくだけにする。

いずれにしても、これらの二つの論考をめぐる問題は、その内容を少しでも追ってみると、アリストテレスかデカルトか、という新旧の自然像の対比とはまったく別の角度から検討される必要があることを知らされるであろう。そして、これまで二つの論考を概観してきたわれわれにとって、どちらの論考も実際には「神の自由」を主題としていることに気づくことは、それほど困難ではないであろう。『自然法則の偶然性について』はその結論で、ブートルー自身の自然にかんする偶然論的形而上学が、最終的には「神の自由の説」であることを表明し、反対に『デカルトにおける永遠真理について』の方は、その主題が神の完全性と自由をめぐるものであることを、初めから表明している。したがって、二つの論考の関係を理解するための鍵は、結局のところ、神の自由をめぐるこれらの理論の関係ということに求められるのである。

『自然法則の偶然性について』における神の自由とは、世界の一般的な諸形式と諸法則との段階組織が指し示すところの偶然性、ということである。これはすなわち、世界における多層的構造の作者である神が、階層性のゆえに自然世界全体において法則的決定性から自発性や創造性へと進化する、自由の法則の作者自身であるということであり、いいかえれば神はその知性によって、自由な発展へと進むべき世界の運動の必然性を理解すると同時に、その理解の下で世界を創造するという仕方では、意志的な自由を発揮している、ということである。

一方、『デカルトにおける永遠真理について』における神の自由とは、神が論理的真理や数学的真理にかんして、その知性ゆえに本質どうしの必然的結合を理解する一方で、この結合の体系内部での相対的無矛盾性を根拠にして、複数の結合の可能性のもとでの自由な決断を行う、ということである。神にとっても絶対的な意味での矛盾を受け入れることはできない。しかし、その形式的結合関係の相対性という観点からして、永遠真理の体系としての相対的偶然性は十分に理解できる。その偶然性の理解のもとで、永遠真理の必然性を人間精神に対して吹き込むことは、その自由な能力の範囲内にあるのである。

これらの二つの分析を重ね合わせると、ブートルーにとって神の自由とは結

局どうということになるのか。いうまでもなくそれは、神における、知性と意志の面での完全性にかんする両面性ということを意味している。神は最完全な存在者である。しかし、その完全性は必然的なものとしても偶然的なものとしても、両面的に理解することができる。神がこの両面性を同時にもちうるということが、他ならぬ最完全な単一実体としての神の力能の核心にあるのである。

二つの論考はこうして、神の完全性の理論として重ね合わせることができる。とはいえ、ブートルーの思想の含意はこれに尽きるわけではない。世界の構造性の作者としての神の完全性と、論理的・数学的必然性の作者の完全性とは、ともに、人間における科学的認識と道徳的実践の可能性の問題や、数学的真理の探究の論理の問題に直結している。神は知性にかんして無限であり、人間はまったく有限である。同様に、神は意志において無限であるのにたいして、人間はまったく有限な意志の自由しかもっていない。とはいえ、この有限・無限の対比は、知性と意志の側面において完全にパラレルなものではない。人間知性についての有限性にかんしては、疑問を挟む余地がない。しかし、人間の意志の働きにかんしては、具体的行為におけるその制限と同時に、習慣形成における創造性という意味での、無際限な進歩の可能性を内蔵している。デカルトが『第四省察』で、「私が神のある映像と似姿⁽¹¹⁾を宿しているのは、主として意志の点からである」と述べたのとほぼ同じように、ブートルーにとっても、人間はその道徳的意志の観点から見られる限り、ある意味では「小さな神」なのである。

したがって、自然認識と数学的探究の本性を説明するブートルーの非決定論の理論は、神の自由を分析する形而上学的であると同時に、人間精神の能力に本質的に内在する自由を確証しようとする理論でもあることになる。本論の冒頭では、ブートルーの哲学を特徴づけて「形而上学の構築によって、それまでのフランスのスピリチュアリズムの伝統を生かしつつ、科学的知識のもつ積極的な意義を認める新しい精神主義の哲学の可能性を明らかにし」ようとしたものである、と規定した。その新しい精神主義の哲学とは、人間精神によるより柔軟な科学と、多元的な数学的真理の可能性を示すことで、人間の自由な本性を明らかにしようとした哲学であったということになる。

ブートルーは七〇歳をすぎた晩年に、その哲学的著作の選集を編集した編者との会話において、次のように自分の哲学の根本を要約している。「私は事実として否応なしにわれわれに与えられている科学、それをそのまま事実と認めて出発した」。科学を「事実」と認めるということは、それが世界についての

全面的で完全な説明であることを認めることではない。反対に、科学を事実と見ることは、科学が「個性や目的性や自由などの概念」と矛盾しないことを明らかにする。というのも、科学についてしばしば主張される独断論や厳格な意味での決定論は、科学そのものからは決して必然的に帰結しないことが、科学の内部の分析を通じて明らかになるからである。自然法則は事実であって原理ではない。同様に、原子や法則、決定論という考えもそれ自体は事実であって原理ではなく絶対者でもない。「これらは進化、歴史、生成過程をもっている」。そして、この進化と生成の源泉をどう理解するかという点に、科学と哲学との分かれ道が現れる。科学は与えられた事実を別のものに還元するだけであるから、進化の源泉そのものにたいしては単に盲目的原因を認めるだけである。これはつまり、科学的知識の進化の源泉を理解不可能なものと認めることである。

これにたいして、哲学は、意識とか生命とか人間の歴史とかを通じて、科学を動かす真の意味での活動が何であるかを知ることができる、という立場を採用する。これはつまり、宇宙において科学を生み出した活動と、人間の精神において知識を追求しようとした精神の働きとが、根本において通底しており、同質の本性をもっていると考えることである。

「こういう見方に立つ哲学が、どうしてもある程度擬人的なものになることは私も認める。いったい私はこう考えるのである。人間精神はその反省の進みにおいて、まず最初、事物を「人間との類比によって (ex analogia hominis)」判断する。これが独断的哲学である。そして次には、「宇宙との類比によって(ex analogia universi)」判断する。これが科学である。しかし次いで再び、ただし科学の教えるとことを利用しつつ、「人類との類比によって」事物を判断する。これが偶然性と自由の哲学である。人間にとって、宇宙は、人間の関数としてしか存在しえないのである」⁽¹²⁾

ブートルーの「偶然性と自由の哲学 (la philosophie de la contingence et de la liberté)」は、このように、科学という事実を通して、もう一度人間の精神へと向き直って考えようとした哲学である。彼の非決定論や偶然論は、あくまでも、神の自由の理論の下で構想された、人間の自由の哲学の提唱なのである。それでは、彼のこの哲学がどのような形で、彼に続く人々にとっての、より柔軟な科学や多元的な真理の可能性の擁護への道を用意しえたのか。われわれはこの点については、彼の周囲にあって、彼とは別の角度から精神の自由を擁護しようとした、義弟のアンリ・ポアンカレや弟子のエミール・デュルケ

ームの理論的営為を見ることで、はっきりと確認することができるであろう。

フランス数学界の最後にして最大の天才とされるポアンカレは、ブートルーの妹の夫として、ブートルーの理論的洗練に力を貸すと同時に、ブートルーの勧めで哲学的著作の刊行を試みた。彼は数学的真理にかんするさまざまな哲学的考察を重ねるなかで、デカルト的な永遠真理をめぐる哲学的吟味という問題意識を継承し、それを非ユークリッド幾何学の正当化という問題とからめて先鋭化した。彼は算術と幾何学における人間精神の創造性のあり方について、よりダイナミックでより立体的なモデルを提供するという形で、ブートルーの問題意識の重要性を明晰に示したのである。

ポアンカレの代表作は『科学と仮説』であるが、そこでのポアンカレの立場とブートルーの思想とは次のように重なり合う。先に見たように、ブートルーの理論では、数学的真理について神の意志という形而上学的根拠を与えることで、結果的に算術と幾何学にかんする必然性、確実性、不可疑性に大きな疑問が付されることになった。ポアンカレはこのような形而上学的視点からの必然的真理の批判を行うわけではない。彼はかわりに、一方ではユークリッドの体系と同等の妥当性を主張できる複数の非ユークリッド幾何学の可能性に言及することで、数学的真理の確実性が仮定的なものであることを明確にした。彼はさらに、ラッセルらの論理主義者たちによる実無限に依拠した集合論的基礎づけを批判することで、数学的真理の必然性を突き崩したのである。

他方、デュルケームはブートルーのソルボンヌにおける代表的な弟子の一人として、非決定論的世界観を自然世界でなく人間世界について、つまり宇宙ではなく社会において実証しようとした。さらに、彼は「社会という神」という独創的な宗教観を提出することで、師のブートルーの「人間にとって、宇宙は、人間の関数としてしか存在しえない」を「人間にとって、社会は、人間の関数としてしか存在しえない」へと書き換えた。

『自殺論』に代表されるデュルケームの社会学的分析においては、「社会的事実」の統計学的分析という手法を通じて、社会全体に働きかける集合的意識のもつ統計的実在性にコミットする一方で、個々人の精神のもつ無記性を確保することで、人間本性の自由という主題についての新しい論法が開拓された。また、デュルケームの後期著作『宗教生活の原始形態』などでは、集合的意識が記号的象徴の創造を通じて社会的連帯を形成することに、宗教現象の中軸を据えるという、新しい宗教哲学が提唱された。ブートルー自身は弟子のこの新しい宗教哲学に全面的に賛成したわけではないが、このような理解が宗教にた

いする科学的アプローチとしてはもっとも正当性をもつことを指摘して、弟子の理論のさらなる発展にたいする積極的な助力を惜しまなかった。⁽¹³⁾

このように、われわれはブートルーを中核とする三人の理論を包括的に把握することで、実証主義や観念論、あるいは論理主義という一九世紀後半から二〇世紀前半の主要な西洋哲学的潮流の陰に隠れて、これまであまり注目をされることのなかった、非決定論という新しい思想の実態とその意義について、改めて目を開くことができるようになると考えられる。ここではその影響関係などについて、これ以上詳しく見ることはできないが、その具体的な交流の一端については、彼らの理論をその他の関係理論との参照の下でも解明しようとした、拙著を参照していただければ幸いである。⁽¹⁴⁾

註

- (1) Émile Boutroux, “Author’s Preface”, in F. Rothwell’s translation, *The Contingence of the Laws of Nature*, The Open Court, 1916, p. 4.
- (2) Boutroux, “Author’s Preface” in F. Rothwell’s translation, *Natural Law in Science and Philosophy*, The Open Court, 1914, p. 6ff.
- (3) エミール・ブートルー『自然法則の偶然性』, 野田又夫訳, 創元社, 一九四五年, 七—一二頁。漢字の表記を現代風に改めたほか, 言葉遣いについても現代風に変更したところがある。以下本書では, この訳書に限らず, 随所で表現等を現代風に書き換えつつ, できるだけ先行する翻訳を積極的に活用することに務めることにする。
- (4) 同書, 一一七頁以下。
- (5) 人間精神の本質的な特性を習慣形成に見る見方は, ブートルーに先行するメヌ＝ド＝ピランとフェリックス・ラヴェッソンに由来する。『自然法則の偶然性』と同じ訳者によるラヴェッソン『習慣論』, 岩波文庫, 一九三八年には, 付録としてベルクソンによる「ラヴェッソンの生涯と著作」が付けられている。
- (6) 同書, 二七四頁以下。
- (7) Émile Boutroux, *De veritatibus aeternis apud Cartesium*, Germer Ballière, 1874. ジョルジュ・カンギレムによる本書の仏訳は, ブランシュヴィックの序文「エミール・ブートルーの哲学」を付して, 一九二七年に P. U. F. から出版されたが, その新版はマリオンの序文付きで, 一九八五年に Vrin から出版された。新版で除かれたブランシュヴィックの序文は, その『哲学論文集』第二巻, 一九五四年, に収められている。カンギレムによるこのデカルト論の仏訳の様子については, 次の書物を参照されたい。ドミニック・ルクール『カンギレム 生を問う哲学者の全貌』, 沢崎壮宏・竹中利彦・三宅岳史訳, 文庫クセジュ, 白水社, 二〇一一—一七頁。
- (8) 山田弘明『デカルト哲学の根本問題』, 知泉書館, 二〇〇九年, 注の六頁。そ

の「黄金の研究史」は以下の通りである。É. Boutroux, *De veritatibus aeternis apud Cartesium*, 1874, É. Brehier, “La creation des verités éternelles dans le système de Descartes”, *La Revue philosophique*, 1937, E. Gilson, *La liberté chez Descartes et la théologie*. 野田又夫「デカルトにおける形而上学と自然学」『サンス』6, 創元社, 1949. H. Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*, 1962, G. Rodis-Lewis, *L'oeuvres de Descartes*, 1971, H. G. Frankfurt, “Descartes on the Creation of the Eternal Truth”, *Philosophical Review*, 86, 1977, J.-M. Beyssade, *La philosophie première de Descartes*, 1979, J.-L. Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*, 1981, E. M. Curley, “Descartes on the Creation of the Eternal Truth”, *Philosophical Review*, 93, 1984.

- (9) Boutroux, *De veritatibus aeternis apud Cartesium*, p. 17.
- (10) op. cit., p. 66.
- (11) 野田又夫編『デカルト』, 「世界の名著 22」中央公論社, 一九六七年, 二七七頁。
- (12) 引用は野田又夫訳『自然法則の偶然性』の解説「エミール・ブートルールの哲学」より。原文は Paul Archambault, *É. Boutroux: Choix de Textes avec une Étude sur l'oeuvre*, Louis-Michaud, 1920, p. 40f.
- (13) ブートルー『現代哲学における科学と宗教』, 赤松智城・宇野円空訳, 博文館, 一九二一年, を参照。この研究はデュルケームの宗教論の哲学的意義について理解するために, 非常に役立つものである。
- (14) 伊藤邦武『フランス認識論における非決定論の研究』, 晃洋書房, 二〇一八年。本論は基本的にこの著作の第一章の内容を下敷きにしつつ, その他の章の内容も加味することで, ブートルー思想の意義を再確認しようとした論考である。なお, 本研究は JSPS 科学研究費16H03342の助成を受けたものである。

キーワード 非決定論 スピリチュアリズム 自由と必然性 科学と形而上学